

ドキュメンタリー映画「ミツバチの羽音と地球の回転」

◆ 紹介 ◆ 山口県の上関原発に反対し、自然を守りながら暮らしをたてようとする祝島の人々。脱原発を国民投票で決め、自然エネルギーに力点をおくスウェーデンの人々。原発は絶対安全と言い切り、一次産業だけでは島は立ち行かなくなると主張する中国電力の横暴。自然の中に生き、未来のエネルギーを切り開く人々をていねいに描きます。



持続可能を求める旅

— 私たちが切り開く未来のイメージ —

鎌仲ひとみ監督は、「ヒバクシャ 世界の終わりに」（2003年）では、国境のない核汚染の環境で生きる、イラク、アメリカ、そして日本の人々の日常の姿を記録しヒバクシャの声を伝えた。「六ヶ所村ラブソディー」（2006年）では原子力産業の最前線で生きる六ヶ所村の人々取材した。そして今回の「ミツバチの羽音と地球の回転」では描いたものは。

鎌仲監督は言います。

地球温暖化という国境を越えた環境破壊が進む時代に生きる私たちは、私たち自身の生活が環境破壊につながるというジレンマに直面しています。どのようなエネルギーを選択するのか、今、私たちは問われています。このジレンマを解く道はないのか。そのヒントがスウェーデンにあるのではないかと。スウェーデンは脱原発を国民投票で決め、2020年までに石油にも依存しない社会づくりをめざしています。エネルギーをシフトする背景には民主主義や情報の透明性、そして人権意識の高さがあることが見えてきました。CO₂を削減しながらゆるやかながらも経済成長を続け、質の高い福祉を実現しています。

日本とスウェーデンの違いはいったいどこにあるのでしょうか？

山口県上関町で新たな原子力発電所の建設計画が進められています。この原発は瀬戸内海の入り口にある美しい湾を埋め立てて建設されます。この原発予定地の真向かいに位置する祝島の人々は建設に30年間、反対してきました。しかし、島民の思いとはうらはらに計画は進んでいます。埋め立て予定地、田ノ浦は海底から淡水が湧く多様な生物の楽園です。祝島の漁師にとっても最高の漁場です。祝島の人々の暮らしが持続可能でなければ、私たち自身もまた、持続可能ではありません。

「持続可能」という言葉は実に多様な意味を含んでいます。その中でも最も大切だと考えるのは自然の法則に逆らわないということです。今回の作品で表現し、伝えたいと思っているのは普段私たちが見過ごしている自然循環の大きな力です。それを敵にするのではなく、共に生きるという感覚です。実は、私たちの先人たちがそうやって生きて、1000年も2000年も文化や地域を持続させてきたのです。その生き方を再発見し、現代のテクノロジーと共に生かしてゆくという課題があります。それが、私たちの持続可能で安心できる未来のイメージとなるのではないかとこの予感がしています。

一方で絶望的とも思える現実を直視しながら、もう一方で今、存在する可能性と希望を、それがたとえどんなに小さくともあきらめない、そんな眼差しを持ってこのドキュメンタリー映画を制作しました。（要旨）

◆ この映画を見て脱原発後のエネルギーを考えてみませんか。未来に希望を持つために！

